

TOPICS
4

トピックス…④

乳用子牛等の出生頭数の予測を開始します
— 乳用牛群検定全国協議会 —

乳用牛群検定全国協議会（会長：鎌田壽彦 事務局：（一社）家畜改良事業団）では、日本中央競馬会の助成事業（酪農における子牛生産情報システム構築事業）により、国内の乳用子牛等の出生頭数を予測できるシステムを開発し、運用開始しました。誰でも無料で利用出来るよう乳用牛群検定全国協議会のホームページ（<http://liaj.or.jp/kyogikai/>）で平成30年5月7日から公表しました。

1. 4月末時点の予測

この予測情報は、乳用牛群検定で報告される情報をもとにしたもので、8カ月先までに乳用牛から出生する子牛を、雌、雄、交雑種にわけてそれぞれの出生頭数を予測するものです。区分は、都府県、北海道、全国の3区分での予測となっています。また、予測には平均で5%程度の誤差を含みます。

表は平成30年4月末時点の全国での乳用種雌、乳用種雄、交雑種および合計の出生頭数の予測事例です。乳用種とは、ホルスタイン種、ジャージー種およびその他の乳用種のことです。出生の合計数では、平成29年12月～平成30年11月までの1年間で746,300頭の出生予測となっており、平成29年1月～12月との比較（以下、「前年比」という）で101.7%と子牛の増頭傾向が見えます。

これは通常、暑熱期である8月の授精は繁殖成績も思わしくなく、その妊娠期間から翌5月は毎年、出生頭数が減少するのですが、昨年の北日本と東日本が冷夏であったため5月の減少が食い止められたことが全体的な子牛増頭の要因と考えられます。

なお、子牛出生頭数を種類毎に見ると、交雑種255,100頭（前年比98.1%）、乳用種雄は202,400頭（同97.4%）といずれも前年割れしています。これに対して、乳用種雌は288,800頭（同108.5%）と大きく頭数を伸ばす予測となっています。予測どおりであれば、平成21年をピークに低迷していた乳用雌の出生頭数が、平成29年から本格的な増加に転じ、平成30年は28万頭を越えるという予測となっています（図参照）。一方、交雑種と乳用種雄の出生頭数は、引き続き減少することが予測されます。

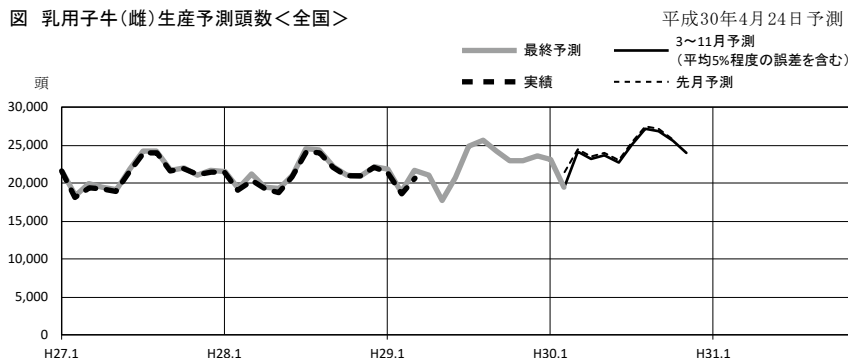
表 子牛の生産予測情報（全国）

単位：頭、%

	乳用種（雌）		乳用種（雄）		交雑種		計	
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	
平成26年（実績）	236,428	/	256,629	/	256,515	/	749,572	/
平成27年（実績）	252,543	106.8	224,047	87.3	268,227	104.6	744,817	99.4
平成28年（実績）	253,962	100.6	212,039	94.6	268,527	100.1	734,528	98.6
平成29年（予測）	266,100	104.8	207,800	98.0	260,000	96.8	733,900	99.9
29.12～30.11（予測）	288,800	108.5	202,400	97.4	255,100	98.1	746,300	101.7

資料）乳用牛群検定全国協議会

図 乳用子牛（雌）生産予測頭数＜全国＞



資料：乳用牛群検定全国協議会

2. その他の情報

参考情報として、黒毛和種（ET）の出生頭数、分娩により新たに搾乳を開始する頭数、交雑種生産率の情報も提供します。今後は毎月一度、月末に新しい予測情報を公表して行く予定です。また、その他にも、乳用牛群検定から得られる子牛情報として、性比、双子、死産、難産、早流産、また出生後の早期死亡といったいろいろな情報もあわせて公表します。

なお、予測プログラムの性質上、子牛の生産傾向が急変するような震災や新技術の急激な普及などの事態が発生すると予測精度が低減します。

3. 予測情報の利用にあたって

予測どおりであれば、乳用後継牛の確保としては明るい兆しとなります。しかし、泌乳能力および長命連産性をバランス良く改良しなければ、牛の使い捨てとなってしまいます。ここで紹介した子牛の生産予測情報と牛群検定成績を上手に利用して、遺伝的に優れた雌牛には、性選別精液の交配による計画的な後継牛生産、それ以外の雌牛は、交雑種生産、黒毛和種（ET）生産を行うと良いでしょう。また、生産された雌子牛を事故や疾病等で失わないよう飼養管理にも留意してください。

問合せ：乳用牛群検定全国協議会 相原光夫
事務局：（一社）家畜改良事業団 T03-5621-8921 toiawase@liaj.or.jp